

無意識的なものの現象学

中 村 拓 也

フッサールの現象学は、その展開の最終的位相で様々な限界問題に遭遇することになった。それは、事象そのものへと愚直なまでに突き進むフッサールの思索の道行きからの必然的な帰結である。もつとも、そうした限界問題に突き当たることの必然性は、何もフッサール現象学の最終的位相だけに限られることではない。すでに、その思索の初期段階から、フッサールは後に限界問題として顕在化することになる事象に遭遇していた。一九〇四―五年冬学期講義として知られる、いわゆる時間講義を中心にして、時間意識の現象学的分析に関連する初期の資料を集めたフッサール全集第一〇巻『内的時間意識の現象学について』の最終頁の次の箇所はそのことを象徴的に語っているといえるだろう。

「しかし、真剣に熟慮すべきであるのは、必然的に『無意識的』意識であるだろうような究極的意識を想定しなければならぬのかどうかである。つまり、究極的志向性として、それは（もし注意するはたらきがつねにすでに）あらかじめ与えられる志向性を前提するならば）注意されたものではありえず、したがって、けっしてこの特

別な意味で意識に至ることはなく」(X 382)。

このように最初期と呼ぶべき段階ですでにフッサールの現象学は、限界問題としての無意識に突き当たってしまった。時間講義を中心とする時間論の枠組みでは、この問題はさしあたり、原意識や原印象と把持の問題として捉えられ、その後も一貫して問い深められていくことになる。しかし、そもそも「意識に至ることはない」とされる事象が、意識に与えられるものからのみ出発することをその方法的格率とする現象学にとって許容されるものであるのだろうか。意識されることはないという意味での無意識に逢着してしまうということは、現象学が自らに課した方法論的要求に従うことができないというその挫折を意味するのではないだろうか。

本論考の目的は、無意識という現象学の限界問題に対してフッサールがどのような取り組みを行っているのかを明らかにすることである。なるほど、最初期ですでに限界問題そのものは先取りして示唆されていたとはいえ、その場合、なお接続法Ⅱ式を用いて、反事実的な想定として「『無意識的』意識」が語られていたにすぎなかった。そうであるとはいえ、無意識や無意識的なものが、フッサールにとって居心地の悪い問題であり続けてきたことは確かである。『イデーⅡ』や『受動的綜合についての分析』のなかにも無意識や無意識的なものへの言及を認めることができる (IV 192, XI 154)。そして、一九三〇年代に至って、無意識をめぐる問題は、現象学に解決を迫る限界問題としてはつきりと意識されることになる。そこで、本論考では、二〇一四年に公刊されたフッサール全集第四二巻『現象学の限界問題』の第一部に集成された草稿群のなかでこの問題について比較的まとまった論述を提供している草稿に主に定位しながら、無意識的なものの現象学によってフッサールがどのような事象に取り組み、どのような成果を上

げることができたのかを明らかにする。

論述の手続きは以下の通りである。第一に、『受動的綜合についての分析』において無意識的なのが触発という現象との関連で、現象学にとって前景に現れることになった経緯に光を当てることによって、現象学における無意識的なものとの問題がどのようなものであるかを明らかにする。第二に、『現象学の限界問題』における無意識的なものについての具体的な現象学的分析を取り上げる。ここでは、無意識が、覚醒や眠りとの関連で論じられる。第三に、そうした無意識の問題の深まり行きと相関的に深化することになる意識に対する分析の成果としての意識の重層的構造がいかなるものであるのかを明らかにする。このことを通して、無意識的なものの現象学の成果を見定めることにしたい。

一 『受動的綜合についての分析』における無意識的なものの現象学

『内的時間意識の現象学について』において、そうした事象を現象学の課題としなければいけないことが示唆されていた無意識的なものは、『受動的綜合についての分析』のなかで、触発という現象との関係でいっそう明確な仕方で捉えられている。無意識的なものが現象学の課題となるのは、フッサールの分析が受動性という、もはや積極的な意味で意識あるいは自我が働いていない意識の深層にまで深まっていったことと連動している。そうしてこの受動性の次元で重要な位置を占めているのが、触発という現象である。この触発という現象の分析を通して無意識的なものが現象学の課題とされることになる。『受動的綜合についての分析』では、触発についてこう言われている。

「それ〔触発〕は意識的な刺激、意識された対象が自我に及ぼす独特の動向と理解される」(XI 148)。

このようにさしあたり触発という現象は、「意識された対象」と自我との間の動的関係性のことである。図式的に整理するならば、『イデーニー』に代表されるいわゆる静態的現象学が、すでにできあがった、構成された対象を出発点として、対象と意識の相関関係をノエシスとノエマの分析として展開したのに対して、『受動的綜合についての分析』に収められた一九二〇年代頃の講義に代表される発生的現象学では、対象の発生起源の問いが主題とされるに至る⁽¹⁾。しかし、注意しておかなければならないのは、静態的現象学と発生的現象学は相克的対立関係にあるのではなく、それぞれの成果が相俟って現象学的分析がいつそう深化していくことである。したがって、発生的現象学の成立は、静態的現象学の基本的な意識の相関関係そのものの破棄や乗り越えを意味するのではない。たとえば、『受動的綜合についての分析』のなかでフッサールはこう述べている。

「自我にとっては、意識的に構成されたものは、それが触発するかぎりでのみ現にある。触発的刺激を及ぼすかぎりでのみ、何らかの構成されたものはあらかじめ与えられているのであり、自我が刺激に従い、注意し、把握しつつ対向したかぎりにおいて与えられている。それが対象化の根本形式である」(XI 162)。

あくまでも静態的現象学全体を基本的な分析の図式として貫く意識の相関関係が、この場合では、自我と触発するものとの間の相関関係として「対象化の根本形式」とされるに至っている。対象化の根本形式としての相関関係は、

あくまで意識的に構成されたものと自我との相関であるとされている。もっとも、意識的に構成されたものが触発的
刺激を自我に対して及ぼし、その刺激に対して自我が注意し、把握するという対象構成の動的構造が明らかにされて
いる点に注意する必要がある。

さらに、注目すべきなのは、注意や把握という自我による積極的な対向に先立って、触発する当のものは、すでに
意識的に構成されているということである。これによって自我の積極的関与に先立つ何らかの对象的統一の成立が顕
わにされている。しかし、自我と意識とを区別し、後者に自我を触発することを可能にするような、自我の積極的関
与以前の対象統一の働きを認めることは、現象学を原理的な困難に直面させることになるように思える。

「感性的与件（とそうした与件一般）はいわば触発力光線を自我極へと送るのであるが、それ〔触発力光線〕が
弱い際には、それはそれ〔自我極〕に到達せず、現実にはそれ〔自我極〕に対する覚起する刺激にならない」
(XI 149)。

フッサールは「対象化の根本形式」として「意識的に構成されたものは、それが触発するかぎりでのみ現にある」
と述べていた。しかし、ここでは、自我極に到達することのない、感性的与件からの触発が論じられている。そもそ
も対象が生起する対象の発生そのものが問われる際に、いったいいかにして対象化以前のもの語る事が可能なの
であろうか。ほかならぬフッサール自身が「触発的刺激を及ぼすかぎりでのみ、何らかの構成されたものはあらかじ
め与えられているのであり、自我が刺激に従い、注意し、把握しつつ対向したかぎりにおいて与えられている」と述

べているのではなかったか。そうであるならば、自我に対する「覚起する刺激にならない」事象は、自我に対して与えられておらず、触発として自我の注意を引くことができているのであるから、「触発するかぎりでのみ現にある」に倣って言えば、現にないということになりはしないだろうか。現になく、与えられてもいない事象についていったいいかにして語ることが可能なであろうか。これこそが触発という現象の分析を通して現象学が直面することになる原理的な困難にほかならない。

すでに見てきたように、發生的分析に深まりと共に、フッサールは、自我と触発という問題構制に立ち入る。發生的現象学の立場に立つことよって、「対象化の根本形式」として取り上げられている知覚そのものの發生が対象の側のみならず、その相関者である自我の側に関しても問い深められる。すなわち、知覚の対象としての事物の發生だけではなく、自我そのもののもつ歴史、自我の發生が問題となる。

ミカリによれば、受動的綜合の分析の際に問題となっておりのは、意識あるいは主観的生の内にある「破棄できない匿名性」を具えた「自我に先行する生の次元」にほかならない⁽²⁾。したがって、靜態的現象学で主題とされることになった志向性の発出点としての自我極を担う純粹自我と、受動的綜合が生起している「自我に先行する生の次元」、自我が極化する以前の生そのものとを区別する必要がある。

もつとも、ここで「自我に先行する」ということの意味をあまりに狭くとらえてしまうことには危険がある。極化される以前は、すべて自我に先行し、自我と無関係になってしまふのだろうか。そうであるからこそこの「自我に先行する生の次元」とそこに位置づけられる触発するものとは無意識的なものとされるのだろうか。しかし、それはいつたい現象学にとって言明可能性や到達可能性の余地を残すのだろうか。それは意識への所与性から出發するという

方法論を堅持する現象学にとって極度の困難ではないだろうか。

こうした困難に直面したフッサールの対応をミカリはこうまとめている。「一方で、彼〔フッサール〕はそれ〔触発という現象〕をノエシスとノエマというカテゴリーに帰そうと試みる（たとえば Ms. C 10）が、他方で、触発の本質に時間のずれが属していることを承認している。すなわち、それ〔触発〕はある一定の強度に達した後になつてからはじめて知覚することができる。したがつて、外から来る触発は原理的に逃れる。フッサールが触発から出発して無意識的なものの現象学的分析を展開することは偶然ではない」⁽³⁾。

このようにフッサールは触発という現象を分析することを通して、原理的に現象学的に与えられることを免れる次元に突き当たつてしまつている。こうした無意識的なものが問題となる次元に直面したフッサールの取り組みは動揺している。フッサールは、この次元をノエシスとノエマという現象学の基本的構図の内に回収しようとするが、しかし、「触発の本質に時間のずれが属す」がゆえに、すなわち、触発という現象は、構成されたものとしてのノエマとしてではなく、或る意味で構成される以前、意識に気づかれる以前に生起してしまつているということをその本質としているがゆえに、従来のノエシスとノエマの相関関係に取り込むことができない。なるほど触発は、いったん自我へと触発という刺激が入り込みさえすれば、ノエシスとノエマの相関関係によつて説明することができる。しかし、触発はそうした意味での相関関係に入り込むこと、すなわち、構成される以前に、意識されることなく生起している、無意識的なものにほかならない。これがフッサールをして「無意識的なものの現象学的分析」という極度の困難に直面させることになる。

こうした限界問題に直面したフッサールの思索は動揺しており、一義的な解釈を容易には許さない⁽⁴⁾。フッサール

には、触発という現象をノエシスとノエマの相関関係に何とかして回収しようとする強い傾向がある。したがって、フッサールによって、そもそも無意識的なものの現象学が語られたのは、こうした原理的に意識に与えられることを免れる現象としての触発現象についてではない。フッサールは、少なくとも『受動的総合についての分析』で無意識的なものについてはつきりと言及する際に、そうした意識に与えられることを免れるかのようにみえる触発現象を無意識的なものと見なしているわけではない。

もしそうした原理的に意識に与えられることのない事象についての現象学が無意識的なものの現象学であるならば、それはもはやフッサールの言う意味での無意識的なものの現象学を超えてしまっている。原理的に意識に与えられることがなく、現象学の主題領野からの逃れてしまうものはもはや無意識的なものとは呼ぶことはできず、端的な無にほかならないだろう。こうした無と無意識との区別を踏まえて言えば、それはもはや無意識的なものの現象学ではなく、いかなる意味でも意識にけつして与えられることのない、原理的に現象学の分析を免れることになる現象学的な無を主題とする、無の現象学にはかならないだろう。フッサール自身は少なくとも『受動的総合についての分析』のなかでは、無を積極的に承認することはなく、無意識的というきわめて特異な仕方であれ⁽⁵⁾、なお意識的であるという仕方で意識のうちに取り込むことによって、換言すれば、無を無意識的なものへと取り込むことによって解決を試みている⁽⁶⁾。

「しかし、何ものも存在していなかった場合に、何かが触発的力をおよそ獲得すべきであるということ、自我にとつてはおよそそこになかったものの、純粋な触発的無が何よりもまず能動的な何かになるはずであるということ

は、まさに理解できない。触発の本質にある段階性に従えば、理解できるままであり本質的に洞察したままであり、そうすると実際それ自体本質領分を踏み越えてしまう理解できない基層をつくる誘因はない」(XI 163)。

このように限界問題に直面した際に、フッサールは無と無意識的なものとを区別することによって対処しようとしている。無と無意識的なものとを区別した上で、無を、いつそう正確に言えば、意識の外なるものを承認することを徹頭徹尾避けようとするのがフッサールの基本的な姿勢である。原理的に与えられることのないもの、換言すれば、現象学にとつての無は、「それ自体本質領分を踏み越えてしまう理解できない基層」にはかならない。そして、意識の最深層次元で顕わになる事象である「理解できない基層」としての無をやはりなお無ではなく無意識的なものとして、無意識という通常の意味で意識されるのとは異なるさわめて特異な仕方ではあるがなお意識的なものとして捉える。では、無を無意識的なものへと取り込み、無意識的なものの現象学が展開されるべきであるが、その無意識的なものの現象学とは、いったいどのようなものなのであろうか。フッサール自身が『受動的綜合についての分析』のなかではつきりと無意識的なものの現象学に言及している箇所を見てみよう。

「それが触発をもはや生じさせないことによつて、それ自体で存立する統一の成立もまた不可能にする阻害し、弱まりゆく對抗勢力が、したがつて、触発なしにはおよそ成立しなかつただろう統一は合法的に存在しないのか。それは決定するのがきわめて難しい問題であり、われわれが、後に必要になることになるように、生ける現在から忘却の領分へと入り込み、再生的覚起を理解できるようにするとときに、特に難しい。私はこう言う必要

もない。われわれが完遂するこうした考察全体には、『無意識的なもの』という有名な名称が与えられうる、と。したがって、このいわゆる無意識的なものの現象学が問題なのである」(XI153f.)。

フッサールは「理解できない基層」、全く意識に与えられることのない無を、現象学から退けた上で、無意識的なものについて語っていた。この箇所が示すのは、フッサールが、無意識的なものを「生ける現在から忘却の領分へ入り込み、再生的覚起を理解できるようにするとき」問題となるものであると考えているということである。注目すべきなのは、この「忘却の領分」であるだろう。この「忘却の領分」へと沈み込んでしまったがゆえに、通常の意味で意識されることがないもの、まさにこれをこそフッサールは無意識的なものの現象学の主題と見なしているのである。フッサールは、一九三〇年代の草稿のなかで、この忘却の領分の問題としての無意識的なもののいっそう具体的な分析へと向かうことになる。

二 覚醒と眠りの導入による分析の具体化

意識に原理的に所与不可能なもの、匿名的にとどまり続けるもの、自我に先行する次元、こうしたものは、無意識的なものとして考えられているのではない。それを事象と呼ぶことがなお許されるならば、現象学の限界問題にほかならないこうした事象は、あくまで無であって無意識的なものではない。フッサールは、時間のずれのゆえに意識を原理的に免れるものとしての無ではなく、意識の底へと沈み込み、まったき暗さのなかへと溶暗してしまった現象を

こそ無意識的なものと呼ぶのである。そして、こうした「忘却の領分」に入り込んだものこそが、無意識的なものの現象学の主題にほかならない。

そこで以下では、無意識的なものの現象学の具体的展開を明らかにするために、フッサール全集第四二卷『現象学の限界問題』第一部「無意識の現象学と誕生、眠り、死という限界現象」に集成された一九三〇年代の草稿群に、なかでもとりわけ二番という番号を付けられた、一九三二年六月一日から一四日に執筆されたとされる草稿に定位する。一九三〇年代草稿のなかで限界問題として取り上げられることになるのは、特にこの二番の草稿から明らかになるように、忘却されることで意識されなくなってしまうものとしての無意識的なものである。もちろん、触発という現象がその際重要な意味をもっており、自我極に到達することのない触発ないし際立ちをどのように扱うのかは、フッサールにとって骨の折れる課題であり続けている。

その脈絡で重要な意味を持つのが、眠りと覚醒である。無意識的なものを具体的に分析するために、この眠りと覚醒を導入することによってフッサールは、ある意味で無意識的なものを、自らの現象学のうちへと、いっそう正確に言えば、意識の関係性の、すなわち、ノエシスとノエマの相関関係に基づく現象学のうちへと取り込もうとする。その分析と錯綜しながら、沈みゆくものとしての「忘却の領分」の特異なあり方が浮かび上がることになる。そこでまず眠りと覚醒の導入による無意識的なものについての現象学的分析の深化についてみていくことにしたい。フッサールは、一九三〇年七月頃に執筆された草稿、附論一で、目覚めた自我と眠れる自我という注目すべき二つの自我概念を導入している。

「①意識活動的自我、本来的志向性における自我、作用に方向づけられており、しかし、それ〔自我〕が潜在的にそれへと方向づけられている、それ〔自我〕にとって存在する対象の地平を、その段階づけられた関心の世界としての世界の地平をもつ自我。／②他の様態は、こうした様態において関心をもたない『意識なき』ないし眠れる自我である。しかし、目覚めた、関心のある自我は、関心のない自我と同じ自我であり、そしてこの自同性 (Selbigkeit) においてそれ〔自我〕はまた、それ〔自我〕によって以前の関心のなかで構成されたものとしての、かつて関心のなくなった世界にも関心をもつ。こうした構成とその獲得物は失われていない、すなわち、〈それは〉自我の側からは、無関心としての沈降性という様態に落ち込んで〈しまった〉」(XLI 14f.)

フッサールはここで論述は極めて重要である。「目覚めた、関心のある自我」と「関心をもたない『意識なき』ないし眠れる自我」は、同じ自我である。この目覚めと眠りは、「自同性」を有する一つの自我の二つの様態にほかならない。しかも、この二つの自我は、その自同性のゆえに、目覚めた自我のもつ「段階づけられた関心の世界」が、たとえそのままに同じ自我がその世界に対する関心を失い、眠れる自我へと移行してしまい、その世界が「無関心としての沈降性という様態」に変わってしまったとしても、なお「こうした構成とその獲得物」を失うことがない。触発現象に引き寄せて考察するならば、この二つの自我は、『受動的綜合についての分析』のなかで、触発され、それに対向するという積極的に活動する自我とされていたものが目覚めた自我に、それに対して、触発にさらされてはいるけれども、その刺激に 대응せず、注意を向けることもない自我とされていたものが眠れる自我にそれぞれ対応している。さらには、同じく『受動的綜合についての分析』のなかで「忘却の領分」と呼ばれていたものは、ここで分

析の深化と相俟って、目覚めた自我によって構成されたものが、そうした構成されたものに対する関心を失って眠れる自我にとつての「無関心としての沈降性という様態」としてその生成過程を含めて記述されている。しかも、いったん関心を失ってしまったとしても、構成されたものそのものは「沈降性という様態」に変化したにすぎず、失われてしまったわけではない。したがって、ふたたび目覚めた自我は「以前の関心のなかで構成されたものとしての、かつて関心のなくなった世界にも関心をもつ」。

眠りと目覚めという区別を導入したことは、『受動的綜合についての分析』では、なお図式的にしか語られることになかった。触発という現象が、触発という現象そのものもつ捉え難さから、翻って現象学の分析の深化を促すことになった。注目すべきなのは、フツサルを動揺させることになった、自我が応える以前の感性的統一あるいは際立ちの問題を巡る分析の深化である。先に挙げた、全集第四二巻の第二番草稿、すなわち、一九三二年六月一日から十四日にかけて著された草稿では、こう言われている。

「さて、触発（刺激）の二重概念を表す触発における根本区別をなお顧慮する。ここでは眠りと覚醒の区別が問題である。／＼さしあたり目覚めは、自我がたえず能動しており、たえず触発に応えており、触発するものに対向し、〈それ「触発するもの」に〉取り組んでいるということによって性格づけられている。当然、すべての触発するもの〈に〉というわけではないが、あらゆる内在的な時間位相において、すべての感覚領野は、一般的に語れば、変化する特殊な際立ちを具えており、それに応じて自我は多重な感覚『刺激』に襲われている」(XIII 34)。

ここでは『受動的綜合についての分析』で展開された分析が基本的に踏襲されている。そこからさらに、触発に相應する自我が明確にここで目覚めた自我と規定されている。そして、触発に相應する以前に自我は、「多重な感覚『刺激』に襲われている」。このように触発についてのフッサールの考察は歩を進め、自我が対向する以前に、自我が感覚に襲われる有様に言及するに至る。そして、さらにここで自我を特定の感覚刺激に対して対向させる、すなわち、眠れる自我を覚醒させるものへと分析は進められる。

「こうした与件のみが問題であったかのようにふるまうならば、覚醒に対してはこういうことができる。すなわち、もし、自我が特別な触発に従い、感覚刺激領野だけが問題となるということが前提されるならば、それが生起するのは、この触発がすべての触発のなかで最も強い触発的力を有しているからである。（際立っているという上の意味での）感性的刺激は、現存在を巡って、つまり、自我の応える向き変えを確立するという形式での現存在を巡って争っている。したがって、あらゆる触発は、『力』という様態のような何かをもつ。つまり、それ〔触発〕は、自我にのみ向かうのではなく、それ〔触発〕はそれ〔自我〕を襲うだけではなく、それ〔触発〕は、それ〔自我〕といくらか関係し、それ〔触発〕は、それ〔自我〕そのものを目覚めさせ、それ〔自我〕を引き寄せる。しかし、それをすべての刺激がなし、そのように争っている」(ibid.)。

「ここで注目すべきなのは、なによりもまず「あらゆる触発は、『力』という様態のような何かをもつ」ということである。ここで触発が自我の対向を勝ち取る具体的な様子が明らかにされる。」すべての触発のなかで最も強い触発

的力を有する」触発が「自我の応える向き変え」を獲得する。自我は、「多重な感覚『刺激』」によってたえず襲われている。そして、「多重な感覚『刺激』」は、その現存在を、すなわち、自我の対向によってはじめて自らの現存在を獲得することになる。しかし、すべての感覚刺激が現存在を獲得するのではなく「現存在を巡って争っている」。諸々の感覚刺激の争いを決着させ、感覚刺激に自我に対する現存在をえさせるものこそが、ここで力あるいは触発的力と呼ばれているものにほかならないのである⁽⁷⁾。フツサールはこうした事態を要約的にこう述べている。

「際立ちが力を獲得する。そして、自我はいまや触れられるだけではなく、『引き寄せられ』あるいは『目覚めさせられ』、そしていまや応えねばならない。それ〔自我〕は目覚め、諸々の対向、諸々の活動が遊動し始める。注意の最も広い概念は、覚醒触発、自我がそれに対して目覚める〈触発〉を包摂する」(XIII 35)。

感覚刺激による触発に対して、自我が対向するに至る動態が記述されている。しかし、こうした記述は、目覚めた自我に重点を置いてなされている。フツサールは、眠れる自我そのものについていつそう微視的に分析を進めることによって、事態はこれほど図式的でも単純でもないことを明らかにしている。

「それに対して、眠りはどのように性格づけられるか。ここには諸々の触発の闘いはない。それ〔触発〕は、自我を襲い、それ〔自我〕にいわば触れ、それ〔自我〕に対して現にあるけれども、それ〔触発〕は無力である。そして、そのように諸々の力の相互の格闘は滑り落ちる。だが、融合の段階性、諸々の領野における際立ちの類

型群といっそう大きな隔たりやいっそう小さな隔たりの区別は現にあり、いまやそれらに眠りからの覚醒という現象が関係する」(XLI 34.)。

自我が、諸々の感覚刺激のなかの最も触発的力の強い触発によって目覚めさせられることによって始めて、自我の対向を巡る争いが諸々の感覚刺激のなかにあったことが明らかになるのである。自我が目覚めていないかぎりで、換言すれば、自我の対向を触発が獲得することができていないかぎりで、なるほど、その場合ですら触発は自我に対して「現にあるけれども」、そうした触発は無力である。その意味で「諸々の触発の闘いはない」。

注意しなければならぬのは、触発が無力であるからといって決してそれは無ではないということである。というのは、触発は、自我の対向を獲得することがなくとも、それでもなお自我に触れ続けており、その意味で「現にある」からである。触発が自我の対向を獲得することがないならば、すなわち、自我が目覚めることがないならば、その触発は自我を目覚めさせるような触発的力をもたない。自我を目覚めさせることができていないという意味で、すなわち、無力であるという意味で、諸々の触発は同じであり、そこに闘いはない。その意味で、諸々の触発の争いは「眠りからの覚醒という現象」に関係しない。しかし、そうであるからといって決して無ではない。「眠りからの覚醒という現象」に関係するのは、触発的力の争いというなお図式的で単純化されたものではなく、遙かに微細なもの、触発が自我に触れているあるいは現にあるといわれる事象の具体相である「融合の段階性、諸々の領野における際立ちの類型群といっそう大きな隔たりやいっそう小さな隔たりの区別」なのである。

さらにこの場合に留意しておかなければならないのは、なるほど、触発が自我に触れているという事象の核心が

「融合の段階性」や「いっそう大きな隔たりやいっそう小さな隔たりの区別」とされているけれども、それが単純な量的な大小や段階性を意味するわけではないということである。むしろ触発という現象にとって重要なのは、触れられている側である自我のあり方、すなわち、自我の眠り、いっそう正確に言えば、眠りの深さが関係しているということなのである。

「さてしかし、眠りという現象には深さという区別もまた属している。(その多次元的な類型群を具えているが、にもかかわらず、同等性、多さや僅かさの区別を具え、ならびに、その連合的統一化、統一的布置、したがって、『量』の増大する上昇を具えた) 際立ちの段階性は、隔たりの同じ程度と量ないし、かつて覚起力を受け取った同じ類型が、別の時には、自我を目覚めさせることに成功しないという仕方での深さと連関している。相対的に大きな明るさや(以前の静けさからの隔たりにおける) 大きな音は、深く眠っているものを目覚めさせず、その一方で、『軽い』眠りの際にはわずかな差異だけでもう目覚めに至る」(XLI 35)。

自我を眠りから目覚めさせるのは、「際立ちの段階性」だけではない。自我の側での眠りの深さもまた同様に眠りからの目覚めにとっての重要な契機である。自我が眠りから覚めて、触発に向向するかどうかは、「際立ちの段階性」の程度に一義的に対応しているわけではない。際立ちの程度が等しくとも、自我はその眠りの深さに応じて、目覚める場合も目覚めない場合もある。こうして目覚めと眠りの導入によって、従来図式的にしか説明されなかった、触発と自我の相関性の成立の動態の具体相に新たに光が当てられることになった。しかし、フッサールは、ここで眠りの

深さを持ち出すことによつて、いったい何を意図しているのか。このことが明らかにされねばならない。

三 無意識的なものの現象学的分析の意義——意識の重層的構造——

なぜ、自我は、際立ちの段階性の程度に依つて、一義的に目覚めることがないのだろうか。この場合に、自我が目覚めるかどうかによつて決定的なのはいったい何なのだろうか。一対一対応を基本とする因果関係に基づく強い自然主義に抗する反自然主義的立場をその基本とする現象学によつて、この問題とその解決とは重要な意味をもつ。触発と自我との関係が、一義的に規定可能な因果関係ではないということが明らかにされねばならない。この問題にフッサールは自我に目を向けることによつて答えを与えようとする。

「しかし、触発的力は、単なる際立ちの『量』の機能ではない。それ〔触発的力〕は、その〔自我の〕そのつどの現勢的主題に即して受け取り、そこから放出する自我の関心に依存する……」(XLI 43)。

さらに、触発と関心の関係については、いっそう具体的に、こう言われている。

「さて、しかし、私はそれ〔触発するもの〕の下にあり、私はそれ〔触発するもの〕をしつかり捕まえており、両者は一つである。さて、しかしここが、関心について語る原場所である。私は非常にさまざまな仕方で事象の

下にあり、それ〔事象〕は、様々な尺度で私の関心を引く。私がそれ〔事象〕に関心をもてばもつほどますますそれ〔事象〕は私を引き寄せ、私を自己の許にしっかりと捕まえる」(XIII 40 f.)。

ここではつきりと「触発的力は、単なる際立ちの『量』の機能ではない」ということが言明されている。もちろん触発的力もつ際立ちの量の多寡を度外視することはできないが、触発的力は、そうした量の多寡によって決まるのではなく、それが触発している「自我の関心に依存する」。自我は、自我に触れ続けているさまざまな触発に対して、その触発の際立ちの程度の量の多寡にのみしたがって、触発に応えるように強制されるのではない。そうではなくて、自我がさまざまな触発的力に対してどの程度関心をもつかもまた、触発的力そのものの多寡と同様にあるいはそれ以上にさまざまな触発のどれに応えるかを規定するのである。そうであるからこそ、同じ程度の触発的力に対して、自我はあるときは目覚めまたあるときは目覚めないということがありうるのである。

では、自我の関心とはいったいどのようなようにして生じるだろうか、あるいはまた触発に対して具体的にはどのような関わるのだろうか。このことが問題となる。こうした自我の関心は、一方では、意識的にあるいは随意的に向け変えることが可能であり、その意味で意識的あるいは随意的に出来事に対して反応することができるとされている。

「そして再び私が理解するのは、こうした出来事は、かかわったものあるいはかかわるものとしての私の変転のそうした受動的な出来事の推移として、『関心の強度』(意志のエネルギー)の変転としてであるけれども、受動的な出来事の推移としてのみ経過するのではなく、随意的に私の関心を張りつめさせつつ、随意的に消え去った

ものを再び私にとつての際立ちへと強制しつつ、それには限界はあるけれども、むしろ私がこうした出来事に随意的にも反応することができるということである」(XLI 46)。

なるほどこのように私の関心を随意的に向け変える可能性が明言されている。しかしながら同時に、随意的な関心の向け換えにはそもそも限界があることもまた認められている。したがって、関心は、ある一定の限界内で、随意的に向け変えることできるけれども、むしろ基本的には「受動的な出来事の推移」であるとされている。しかし、そうであるとするならば、どのような関心をもつかについては、もはや意識的あるいは随意的なものではなく、ただ受動的にあるいは盲目的に規定されてしまうのだろうか。ここで重要な意味を持つことになるのが、ほかならぬ無意識的なものである。

「覚起は、触発の様態を規定するものであり、眠りから目覚めることが示すように、生の出来事として立ち現れつつある。しかし、覚起は目覚めた生においてもまた出来事として絶えず役割を演じており、そのなかには、われわれがわれわれの確認をなお本質的に補完しなければならぬということがある。補完は、無意識的なものの、ないしはすべての能動性と目覚めた触発性が受け入れねばならない『沈殿』の秘密に係する」(XLI 36)。

覚起が、すでに見てきたような眠りからの目覚めのみならず、目覚めた生でもまた重要な役割を果たしている。そして、注目すべきことに、ここで無意識的なものは、沈殿と並置されている。覚起は、眠れる自我を目覚めさせると

いう役割だけではなく、すでに目覚めた生において意識されることのないものを、すなわち、沈殿してしまったためにもはや力を失い意識されなくなってしまったものを呼び覚ますという役割をも演じている。このように覚起は、眠りからの目覚めの移行のみならず、目覚めた生にさえも重要な意義をもつ。

沈殿と把持との関係が明らかにされることによって、無意識的なものと沈殿とが同義的なものとして並列的に語ることがいかにして可能になるのかが明らかにになる。さらには、ここでこそ無意識的なものと無が異なることの積極的意義が明らかになる。先の引用箇所は、こう続いている。

「把持のプロセスは、志向的『隠蔽』のもとで、絶えざる志向的変様における暗く成り行くプロセスである。われわれはこのプロセスをいま、連続的無力化のようなプロセスと、その極限が目覚めていないようなプロセス、無力であるようなプロセスとみなさねばならないが、それゆえ、眠れる『意識』が無であるということ、それ〔眠れる意識〕が構造なしであるということ、自我が刺激、際立ち、際立ちの類型群を『体験』しないということとを想定することが許されないのと同じように、無へと変転することとみなす必要はない。それらは、自我にとつて『無意識的なもの』という様態にあり、無力、目覚めていないという様態にある」(p.11)。

「把持のプロセス」が「志向的『隠蔽』」としての「連続的無力化」のプロセスであるとされる。しかしこうしたプロセスは「自我にとつて『無意識的なもの』という様態」なのであり、けっして「無へと変転すること」ではない。連続的無力化としての把持は、触発が印象的現在から遠ざかることに比例して、連続的に無力化していくプロセスに

ほかならないが、この無力化のプロセスの「極限」は、あくまで「自我にとって『無意識的なもの』という状態」にあり、無力であつて、けつして無ではない⁽⁸⁾。

自我にとつて意識的にとらえることができないほどまでに把持による連続的無力化を被ることこそが沈殿にほかならない。こうした沈殿したものが、このように印象的現在から遠く離れて沈み込むことによつてまさに意識的にとらえることがもはやできないがゆえに、無意識的なものと呼ばれているのである。では、こうした無意識的なものが無と区別され、なお無意識的なものと呼ばれるのはなぜだろうか。もはや自我にとつて意識的にとらえることができないならば、それこそ無にほかならないのではないだろうか。

否、である。無意識的なものはけつして無ではない。両者を分かつ決定的な要因は、再覚起可能性の有無である。無意識的なものは、無とは異なり、再覚起、すなわち、今一度意識にもたらされる可能性を有しているのである。

「同様に、目覚めた自我の生の流れは、幅広い核に従つて、目覚めた触発性や能動性という生の流れであるが、さらに、すべての目覚めた体験が本質必然的な把持化、力の減少において移り行く、無力で目覚めていない時間化の絶えざる流れである。しかし、こうしたプロセスには、目覚めた現存在の根本部分、すでに沈殿したものの再覚起の絶えざる可能性、つねに新たにまた現れる現実さえもが属している」(Ibid.)。

ここで目覚めた生の流れの内実が、すべて無力で目覚めていない時間化の絶えざる流れにほかならないとされる。印象的現在において目覚めた生は、把持という連続的無力化を免れることはない。目覚めた生は、連続的無力化を通

して無意識的なものという様態をとるまでに沈殿していく。しかしながら、これは目覚めた生の無化ではない。とい
うのは、こうした把持という連続的無力化のプロセスには「目覚めた現存在の根本部分、すでに沈殿したものの再覚
起の絶えざる可能性、つねに新たにまた現れる現実さえもが属している」からである。しかも、目覚めた生が、把持
という連続的無力化を免れないことは、それにもかかわらず、目覚めた生が沈殿した極限が無ではないという単なる
消極的な意味をもつだけではなく、無とは異なる再覚起可能性をもった無意識的なものであるという点に着目すれ
ば、意識分析にとって積極的な意義もまたもつのである。

意識は、目覚めた様態にのみ限定されない。目覚めた様態での意識はそれだけで完結しているのではなく、かつて
の目覚めた生が沈殿した無意識的なものもまた再覚起可能なものとしてその目覚めた生に属している。そして、それ
こそが無意識的なものの現象学的分析によって顕わになる、目覚めた意識的な生と眠れる無意識的な生との融合的統
一体としての意識の重層的全体構造にほかならない。

「生の統一全体は、普遍的融合に基づく、したがって、連合に基づく統一である。しかし、そのときまさに連合
の特別な様態（と連続的に時間化される連合と遠隔連合——対化する、統一へと波及する多性を形成する遠隔連
合に対する）は、それが目覚めさせる、特別な時間的布置を統一的に沈殿から目覚める連合となりうるというこ
とである。それはほかならぬ何かを想起する、無意識的になったものを再び記憶に至らせることであり、それ
は、さらに進み行き、ますますいっそう完全な覚醒という、すなわち、最終的に可能力的に覚起させる直観的再
想起という本質上の可能性が属している」(XLI 37)。

意識が目覚めた自我のみに限定されるのではなく、同時に眠れる自我でもあるという重層構造をもっていること、このことを明らかにしたことが無意識的なものの現象学的分析の重要な成果である。このことによって、本節のはじめに立てた問題を解決する道が開かれることになる。その問いとは、なぜ、自我は、際立ちの段階性の程度に応じ、一義的に目覚めることがないのだろうかという問いである。さしあたって、フッサールは意識的に形成される自我の関心に応じるからであるとしていた。しかしながら、意識的に関心を形成することには限界があるということもまた触れていた。同じ程度の触発的力に対して、ある時には自我が目覚め、ある時には目覚めないことがあるということもまた触れていた。同じ程度の触発的力に対しては、意識的に形成された自我の関心よりもむしろある触発的力に対して応えるかどうかは、そうした触発につねに触れられている意識が、目覚めた自我と眠れる自我という二つの状態をもってはいるが、また同時に自同性を有する意識であるということから説明することができる。

したがって、眠れる自我は、目覚めた生が把持という連続的無力化を被ることによって成立したがゆえに、無意識的となるまでに沈殿するにもかかわらず、直観による再覚起可能性を有している。そのことによって、眠れる自我という意識の形態にある沈殿した無意識的なものこそが、自我が目覚めるか否か、すなわち、触発に応えるか否かに決定的な影響を与えているのである。すでに見たように、すべての目覚めた体験が免れることができない把持という連続的無力化のプロセスには「目覚めた現存在の根本部分、すでに沈殿したものの再覚起の絶えざる可能性、つねに新たにまた現れる現実さえもが属している」。把持による沈殿のプロセスがつねに働いているがゆえに、沈殿する当の無意識的なものは一定のものにとどまることなく、不断に変化し続けることになる。そうして沈殿した無意識的なものは、現在の意識に与えられる直観を契機として再覚起される。したがって、再覚起される無意識的なもの影響を受

ける意識そのものも一定のものにとどまることはなく、変化し続けることになる。無意識的なものとして沈殿したもののからの影響を受けるからこそ、意識は、同じ程度の触発に対してある時には応え、ある時には応えないということが生じるのである。フッサールは、無意識的なものの現象学的分析によって、意識的現在と無意識的沈殿とが同時に融合的に働いている意識の重層的構造に新たに光を当てることになったのである。

む す び

フッサールは、現象学に対して限界問題として突きつけられることになる触発現象に取り組むことによって、意識の動的重層的構造を顕わにしている。意識の普遍的構造には、自我と自我異他的なものとしてのヒュレーが属している（XII 28）。触発現象とは、一方で、自我異他的なものとしてのヒュレーが眠れる自我に働きかけるという現象である。また、他方で、その触発に比べて自我が目覚める際には、自我の内なる異他的なものとしての無意識的なものが重要な役割を果たすことになる。両方の場合に重要な役割を果たす覚起は、いわばヒュレーという自我異他的なものが自我を目覚めさせようとすることであり、また、それは同時に目覚めた自我の内にある無意識的なもの呼び覚ますことでもある。そして、眠れる自我の目覚めと目覚めた自我の内なる無意識的なもの呼び覚ましは、まさに同時に生起している。触発の分析に端を発した無意識的なものの現象学が解明したのは、意識がこうした自我の二重の覚起が生じている現在と沈殿とが連合的に融合した重層的構造体であるということである。

本論考では、目覚めた体験が把持によって無意識的な様態にいたるまで沈殿したものである無意識的なものの現象

学的意味を明らかにしようと試みてきた。しかし、意識を免れようとする現象を意識のうちへと回収しようとするフッサールの基本的姿勢に従って論述を進めてきた結果として、もう一つの極めて重要な無意識的なものの問題、すなわち、時間のずれによる原理的な所与不可能性としての無意識的なものの問題が問われないままに終わった。なるほど、原理的に所与不可能なものを、無意識的という特異な仕方ではあれ、なお意識しているものとして取り扱うことによって、原理的に所与不可能なものを意識の内へと解消する試みを呈示することはした。しかしながら、フッサールの無意識的なものへの取り組みの動揺と相俟って、フッサール現象学における無意識的なものは必ずしも一義的ではなく、多義的であることを免れない⁽⁹⁾。こうした原理的な所与不可能性もまた、沈殿したものと異なる意味での無意識的なものであり、それはそれで独立に考察すべき課題であるだろう。現象学における無意識的なものの位置づけの動揺は、ある意味でのフッサール自身の事象そのものへの忠実さと、そうであるがゆえに生じる現象学的分析の動揺と不整合の反映にほかならない。こうした多様な無意識的なものという概念を、本論考で取り上げた、沈殿としてのとしての無意識的なものと関連づけつつ、現象学のなかに整合的に位置づけることが新たに課題として課せられることになる。しかし、現象学における無意識的なものの全般的説明は、本論考そのものの目的を大きく超えた課題であるために、改めて論じることにしたい。

註

引用に際して、フッサールのテキストはフッサール全集 (*Husserliana*) により文中に直接全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で挿入した。引用文中の「〜」は編者による補足、「〔〜〕」は引用者による補足であり、／は改行を示す。ゲシュペルトなどによる強調は引用によって脈絡から切り離されていることに鑑みてすべて無視されている。

- (1) 発生的現象学そのものの正確な成立時期については議論があるが、従来の『受動的綜合についての分析』に収められている超越論的倫理学講義が行われた、一九二〇―二一年の冬学期以降に成立したという見解に対して、ベルネットの研究を踏まえれば、全集第三三卷『時間意識についてのベルノウ草稿』が成立した一九一〇年代半ばにまでさかのぼることができるだろう (Bernet, R., *Einleitung des Herausgebers*, in: XXXIII, 2001, S. XLVI)。
- (2) Micali, S., *Überschüsse der Erfahrung. Grenzdimensionen des Ich nach Husserl*, Springer, 2008, S. 59f.
- (3) *Ibid.*, S. 65.
- (4) 現象学の限界問題としての原理的に意識に対して与えられないもの、換言すれば、現象しないものをどのように捉え、位置づけるかについては、研究者の間でも議論がある。たとえば、受動的綜合の分析の触発論に定位して、原理的に所与不可能なものに積極的な意義を認めようとする立場として、ミカリの研究をあげることができる。Cf. Micali, S., *op. cit.*, insbesondere, Kapitel II, S. 41-77. また、『ベルノウ草稿』での時間分析でフッサールが突き当たるとする与えられないもの問題から、構成的現象学の立場を離れて、むしろ積極的に構造的現象学を唱道するのはシュネルである。Cf. Schnell, A., *Hinweis. Entwürfe zu einer phänomenologischen Metaphysik und Anthropologie*, Königshausen & Neumann, 2011, S. 45-76.
- (5) たとえば、こうした特異な仕方での意識の仕方を、ニーは独特の志向性あるいは独自の種類の志向性として、非対象志向性、反省的志向性、衝動志向性、本能志向性、無意識的志向性、時間化の志向性、把持と予持の志向性などと列挙すること、独特の意識の働き方として志向性を論じている。Ni, L., *Urbewußtsein und Unbewußtsein in Husserls Zeitverständnis*, in: *Husserl Studies* 21, 2005, S. 20, 25.
- (6) 『受動的綜合についての分析』での触発論そのものについては、やはりこうした意識内への取り込みという観点から論じたことがある (『フッサール現象学における触発の問題』『同志社哲学年報』第三〇号、二〇〇七年、四九六―四頁)。
- (7) 同じ草稿の別の箇所でもフッサールは同じような事態について言及している。Cf. XLII 28.
- (8) 別の箇所でもフッサールはこう述べている。「触発は、自我に向けられた、それ〔自我〕に訴える動向力とみなされる。沈殿していくプロセスとしての把持のプロセスには、たえざる減退において、比例的に印象的現在からの遠ざかりにおいて、動向力が把握されている。しかし、これは同じ〔力〕によるのもそのつど一定ではなく、変化する力による。したがって、そのことに、沈みゆくものが、どの程度そのつど触発的であるか、どの程度元通りに力のゼロにあるのかは依存する。

無意識的なものの現象学

無意識的なものの現象学

- (9) 『沈殿した』の形式的規定は、そのつどゼロの下にあるが、「ゼロではない」(XIIH 40)。たとえば、ニーは無意識的なものに二義性を認めている。Ni, L., *op. cit.*, S. 23-26.